

TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム 第6期生紹介

※五十音順



名前：旭峻（あさひ りょう）

所属：長岡崇徳大学

出身地：新潟県三条市

今回このプログラムに参加したいと思った動機は二つあります。一つ目は、将来国際看護師として海外の災害の現場で活躍したいからです。自然災害や戦争、大事故など医療を必要としている緊急の現場で、瞬時に医療を提供することができれば「防ぎうる死」を最小限にすることができます。二つ目は、このプログラムが学外で災害看護を学ぶ最高の機会だと思うからです。他の救急の研修会や講習会を探していましたが、コロナ禍で募集中止となっていました。本プログラムがあることを聞き、自分のキャリアデザインに大きく関係する分野なので是非参加したいと思いました。プログラムでは積極的に発言して協調性のある行動をとり、一生懸命頑張りたいと思います。

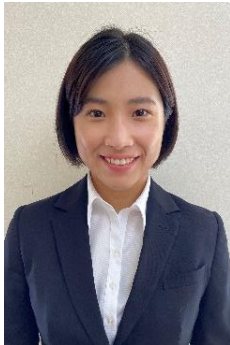


名前：木田千景（きだ ちかげ）

所属：聖路加国際大学大学院

出身地：東京都大田区

家族の被災体験を聞いて育ち、幼い頃から災害や災害医療に関心があった他、東日本大震災発生時はテレビの前で見ているしかない自分の無力さを感じ、自分も被災地で貢献したいと思いました。大学卒業後は看護師として救命救急センターに勤務、新型コロナウイルス感染症対応をしました。この経験から、感染の恐怖とともに過酷な現場で勤務する医療者に対するケアや、混乱した現場で常に的確な医療を提供するための方法の構築、他機関・職種との連携法の確立等、様々な対応が求められると感じました。この様な対応は、他の災害発生時にも必要です。幅広い視点を持って対応するためには、多様な災害における現状や課題、現場のニーズ、国内外での災害医療の取り組みを学ぶ必要があると思い応募しました。本プログラムでは、他の参加者と切磋琢磨しながら災害看護についての学びを深めていきたいです。本プログラムで経験し学んだことを周囲に還元し、災害看護に対して多くの人に関心を持ってもらい、災害看護の未来について共に考えていけるように働きかけていきたいです。



名前：隈本真有（くまもと まゆ）

所属：佐賀大学

出身地：佐賀県唐津市

東日本大震災等でボランティア活動をした父の話を聞き、日常生活が一瞬で非日常に変わる怖さを感じたこと、急激に状況が変わる災害において、身体・精神両側面の安全・安寧に貢献できる医療者になりたいと思ったことが、災害看護に興味を持ったきっかけです。新型コロナウイルスを含め、近年の様々な災害により、災害看護の需要は高いと考えます。プログラムを通して、様々な事態に対応する力を身につけることができると感じています。また、米国の災害や災害医療を学び、日本と異なる点や共通点を見出し、今後の災害医療・看護に関して取り入れるべき点について検討したいです。今後の災害医療・災害看護に貢献できるよう精一杯取り組みます。



名前：雲井絢子（くもい あやこ）

所属：日本赤十字広島看護大学

出身地：広島県三次市

私が災害看護に興味をもったきっかけは、西日本豪雨災害です。自分のよく知る地域が被害を受けているにもかかわらず、何もできないことがとても悔しく感じました。同時にニュース等を通じて知る救護班の活動に感銘を受け、私自身も何かの形で被災者の力になりたいと思うようになりました。看護師を目指す中で災害医療に携わり、被災者の心も含めて支えとなるような看護師になりたいと思うようになりました。今回のプログラムでは、コロナ禍や米国の災害医療など幅広い知識を身に付けることが出来ると思い参加しました。全国の共通の夢を持つ仲間とともに自分自身が目指す夢に向かって少しでも近づくことができるように励みたいと思います。



名前：櫻井あやの（さくらい あやの）

所属：東京医科歯科大学

出身地：東京都日野市

参加理由は、日本国内の災害対応だけでなく米国の災害医療について学ぶ機会を魅力的に感じたからです。参加した勉強会で、私が思う日本の避難所とは異なる国外の避難所を知り、日本の災害医療をより高度なものにするには海外のアイデアも柔軟に取り入れていく必要があると感じました。プログラムで国内外の災害医療について幅広い知識と視野を得ることが、日本の災害医療の水準を上げるために看護職としてすべきこと、現時点での課題について考えるきっかけになると思います。プログラムを通して他の学生の災害看護に関する意見を聞き、見分の幅を広げたいです。その場で得た新たな観点や知識を共有したり、先生方の経験を聞いたりすることで更に自分の考えをアップデートしたいと考えています。



名前：根岸美砂（ねぎし みさ）

所属：聖路加国際大学

出身地：新潟県上越市

私はこれまでに、中越地震や東日本大震災をはじめ、海外在住時にはテロや強盗に遭遇するなど、様々な災害や事故を経験しました。一瞬で日常が崩壊し、自分を含め周囲の生命が脅かされる恐怖と不安を覚えています。同時に、災害時の人々のケアは、生きるための希望や勇気を与えてくれました。私もケアを通して人々の生命力に働きかけたい、健康を守りたいという思いがあり、将来的には災害専門看護師として災害看護の視点から健康問題の改善に取り組みたいと考えています。本プログラムでは、国際レベルの災害看護を学ぶことができ、自分の目的を実現するために必要なヒントが得られると思いました。私の大学は災害看護を学ぶ機会が4年次にしかないため、本プログラムは私にとって災害看護を学ぶ一歩です。本プログラムではメンバーと相互に助け合い、看護師としてのリーダーシップの取り方や、質の良い一次救命の実施方法などを学び自分の即戦力にしていきたいです。また、その学びを災害専門看護師として生きる中で活かせるよう自助努力を継続していくつもりです。



名前：藤原凜（ふじわら しゅり）

所属：宝塚大学

出身地：宮城県塩釜市

私は小学 5 年生の時に宮城県で被災し、当時何も出来なかったことが後悔となり、災害というものを避けて過ごしてきましたが、看護職を志望した背景にも震災があります。被災したからこそ命の儚さや言葉の大切さを知ることができ、看護を学び、患者さんに感謝して頂くことで、人の役に立つ嬉しさを実感しました。自身の経験と向き合い、その経験を糧に、困難に直面している人々を支えたいと考え応募しました。将来は DMAT の一員になりたいと考えていますが、災害現場の医療はどの様に稼働しているのか、一人の医療者として何が出来るのか、地方から来た DMAT や DPAT は限られた人員と物資の中でどの様なことを行っているのかなど、勉強すべき点が多くあります。このプログラムでは、東日本大震災を経験した方々から講義を受け、米国の災害医療体制を知ることが出来るところに魅力を感じました。全国から集まった看護学生とコミュニケーションを取り、広い視野を持つことで、災害以外にも様々なものを主体的に吸収したいです。



名前：吉見萌々（よしみ もも）

所属：千葉大学大学院

出身地：東京都荒川区

このプログラムに応募した理由は、災害看護に関心のある他の学生とワークショップや意見交換を行い、多様な視点から災害看護を学び直すことができると考えたからです。自分だけの学びでは不十分で、他者との交流を通して学びは深まると考えているため、授業や文献、教科書では得られない被災地での体験や支援などを聞き、災害看護に関する学びを深め、看護学研究へ活かしたいと考えています。コロナ禍で留学も難しい中、アメリカの災害医療について学び、現地の医療従事者と意見交換をすることができるのは貴重な体験であり、自身の災害看護に関する国際的な視点を養うために必要な機会であると考えています。